

ニュー・カナディアン新聞と日系カナダ人社会

大木 崇

2016 年 6 月

これは、新保満、田村紀雄、白水重彦共著、「カナダの日本語新聞」（東京：PMC 出版株式会社、1991 年）のニュー・カナディアン新聞に関する項目の要約です

1930 年代のカナダ日系社会の状況

1930 年代のカナダにおける日系人社会は、深刻な経済的・政治的困難と、世代交替の波が交錯する激動の時期でした。まず、ブリティッシュ・コロンビア（BC）州において日系人は厳しい人種差別を受けており、選挙権を剥奪されていただけでなく、公務員や各種専門職への就職、州有地の伐採や公共事業での就労が法的に禁じられていました。さらに連邦政府による漁業ライセンスの削減政策により、主要な産業であった漁業からも締め出しを受けていました。これに加え、1929 年に始まった大不況（世界恐慌）が社会を直撃し、日系社会でも失業者が激増しました。木材関連産業などに従事する日系人労働者は劣悪な労働条件に置かれており、これに対抗するために「キャンプ・ミル労働組合」などの労働運動が展開され、一時は多くの支部を抱えるまでになりました。

一方、この時期は日系社会が「一世の時代」から「二世の時代」へと移行する過渡期でもありました。1931 年には日系人人口の約半数を二世が占め、1941 年には 6 割が生まれながらのカナダ市民権保持者となっていました。カナダの公立学校で教育を受け、英語を母語とする二世たちは、労働市場に参入しようとしたましたが、法制化された差別という厚い壁に阻まれ、優秀な大卒者であっても日系人という理由でカナダ社会での就職が極めて困難でした。そのため、一部の二世は日本や満州へ活路を求めて流出しました。また、一世の間では二世の教育方針を巡って、日本的な教育を重視する「日主白従主義」や、カナダ社会への適応を優先する「折衷主義」などの議論が交わされていました。

さらに、1930 年代に日本が中国大陆への侵略を開始し、国粹主義に傾倒していくと、国際世論は硬化し、カナダ国内でも日系人に対する風当たりが強まりました。長年の排斥に疲弊し、カナダ社会での上昇を阻まれていた一世の中には、不自然なほど威勢の良い国粹主義的なイデオロギーを信奉し、日本に心の拠り所を求める傾向が強まりました。

1930 年代の日本語新聞の状況

こうした社会的背景の中で、カナダの日本語新聞は日系社会の世論形成に大きな影響力を持っていました。1920年代から1930年代にかけては、『大陸日報』、『加奈陀日々新聞』、『日刊民衆』の「三紙鼎立」の時代でした。そして1938年末には二世を対象とした英文紙『ニュー・カナディアン』が創刊され、日加開戦前のバンクーバーでは4つの日系紙が共存することになります。

大不況の影響下にあった1930年代の新聞経営は非常に苦しいものでした。一部の労働者や農家は貧困から購読料を支払うことができませんでしたが、新聞社は読者に新聞を無料で送り続けました。開戦直前頃の発行部数は、『大陸日報』が約4000部、『加奈陀日々新聞』が約2500部、『日刊民衆』が約1500部と推測されており、当時の日本語を母語とする日系人約7700人に対して総計8000部以上が発行されていました。これは一家で複数紙を購読していた層がいたことを示しています。

この時期の日系紙は、カナダ社会に対する姿勢を巡って激しいイデオロギーの対立を抱えていました。その対立軸は「同化志向」と「反同化志向」、そして「文化的同化」と「構造的同化」の組み合わせで整理されます。『大陸日報』と『加奈陀日々新聞』は、日本への帰属意識を強める「反同化志向（日本回帰志向）」を顕著にしていきました。対して、『日刊民衆』と『ニュー・カナディアン』は、労働運動や市民権獲得運動を通じてカナダ社会への平等な参加を目指す「構造的同化志向」を明確にしていました。

各新聞の特徴と読者層

1. 『大陸日報』（日報）1907年に創刊された、カナダ日系社会で最も歴史のある代表的な新聞です。仏教系の色彩を濃く維持しており、経営者の山崎寧は「体制ベッタリ」の姿勢をとっていました。しかし1930年代に入ると、排斥に疲れた日系人の感情を代弁するかのようになり、日本回帰的メンタリティをきわめて顕著にしました。日本一辺倒となり、カナダの新聞か日本の新聞か判別しがたいほど、日本の国粋主義を謳歌した紙面を作りました。読者層は日系一世の大多数を占める仏教徒や保守的な人々が中核でした。発行部数は約4000部と最大で、自社ビルを持つなど経営的にも最も安定していました。
2. 『加奈陀日々新聞』（日夕）1923年9月に、長年『新報』で働いていた鈴木重三が設立した新聞です。鈴木は日本の同盟通信の通信員を務めていたため日本のニュースに詳しく、日本回帰志向が強い特徴がありました。1930年代の紙面は、『大陸日報』よりもさらに一歩右寄りの反同化志向の急先鋒でした。日系社会の利益を擁護する立場から、『大陸日報』と手を携えて日本の国粋主義を支持する論陣を張りました。読者層は、日本への帰属意識が強い

く、国粋主義的な傾向を持つ一世読者が中心でした。発行部数は約 2500 部と推定されます。

3. 『日刊民衆』（民衆）1924 年 3 月に、日系人労働組合（キャンプ・ミル労働組合）の機関紙『労働週報』から発展的解消を遂げて創刊された新聞です。主筆の鈴木悦の指導のもと、労働者の権利擁護と階級意識の覚醒を目指す「構造的同化志向」を持っていました。紙面は働く者の生活を大切にする記事で構成され、労働問題や労働運動のニュースを熱心に報じました。しかし、その社会主義的傾向は、一般の日系人からは「赤旗振り」として警戒される要因にもなりました。鈴木悦の帰国後も、梅月高市らがその精神を引き継ぎ、大不況下でも労働組合活動と連動して発行を続けました。読者層は、木材関連労働者やキャンプ・ミル労働組合の組合員など、労働者階級が中心でした。発行部数は約 1500 部であり、貧しいながらも熱心な支持者に支えられていました。
4. 『ニュー・カナディアン』（NC）1938 年 11 月に創刊された、日系二世を対象とした最初の実全編英文の新聞です。「二世の声」をサブタイトルに掲げ、日本に関する記事はほとんど掲載せず、カナダ社会の出来事や日系二世の動向に焦点を当てていました。二世の社会進出や市民権獲得を目指す構造的同化志向を強く持ち、排斥や差別に対してもカナダ市民の立場から堂々と反論し、カナダへの忠誠を誓う姿勢を貫きました。また、女性の投稿が多く掲載されるなど、社会意識の強い革新的な紙面でした。読者層は、英語を母語とするカナダ生まれの二世、および英語を解する少数の理解ある一世が中心でした。発行部数は推測で 300～400 部程度と少なく、経営的には困難な状況にありました。

以上のように、1930 年代のカナダ日系社会は、大恐慌と根強い人種差別の下で苦難の時期を過ごしつつ、世代交替の波に直面していました。これを反映し、日系紙は『大陸日報』や『加奈陀日々新聞』のように日本回帰・反同化を志向する保守的な一世向けの新聞と、『日刊民衆』や『ニュー・カナディアン』のように労働運動や市民権運動を通じてカナダ社会への構造的同化を目指す革新的な新聞へと二極化し、それぞれが異なる読者層に支えられていました。

加奈太新報

『新報』（正式名称『加奈太新報』）は、主に以下のような特徴を持つ新聞でした。

日刊邦字紙の先駆け 1903 年に社主の鐔木五郎が日本から活字を購入して紙面を刷新し、日系社会全体を対象にすることを宣言しました。さらに翌 1904 年には日刊へと切り替えられ、カナダにおける日刊邦字紙の先駆け（嚆矢）となりました。

強い「文化的同化志向」 思想的な最大の特徴は、カナダ社会への「文化的同化」を強く志向していた点です。日系人は英語を学び、白人の風習を採り入れ、キリスト教に回心（改宗）すべきであるという主張を展開しました。

読者層と他紙との激しい対立 このような方針から、『新報』の読者層の中核は当時の日系社会における最高のインテリ集団であったキリスト教徒たちでした。しかし、当時の日系一世の 9 割は仏教徒であり、キリスト教徒は少数派でした。『新報』が同化志向を鮮明にするにつれて、日本への帰属意識や仏教を重んじる反同化志向の人々との対立が深まり、その結果として創刊された『大陸日報』とは日系社会を二分するほどの激しい競争関係に発展しました。

終焉 長らく同化志向派を代弁する新聞として活動しましたが、激しい競争の中で経営は常に苦しく、1919 年末には精根を使い果たした鎬木が経営を手放し、その後 1921 年に廃刊となりました。

戦時中のニュー・カナディアン紙

提供された資料に基づき、太平洋戦争勃発に伴う日本語新聞の発行停止、BC 保安委員会（BCSC）と『ニュー・カナディアン（NC）』紙の関係、そして厳しい検閲と戦時下における NC 紙の役割について要約します。

太平洋戦争の勃発と日本語新聞の発行停止 1941 年 12 月 7 日、カナダと日本は戦争状態に突入しました。開戦と同時にカナダ国内の日系社会は大混乱に陥り、長年日系人の世論を形成してきた『大陸日報』、『加奈陀日々新聞』、『日刊民衆』の邦字三紙は、12 月 6 日付をもって一斉に発刊停止となりました。さらに、ブリティッシュ・コロンビア（BC）州内にある 51 の日本語学校が閉鎖され、長距離電話は禁止、市内通話も英語に限定されるという厳しい言語統制が敷かれました。この情報源の突然の喪失は日系社会に深刻な影響を与えました。特に、英語を全く解しない多くの一世婦人たちは、邦字紙の廃刊後にやむなく英和辞典を片手に英字紙を読もうとするなど、心理的に大きく動揺しました。同時に日系人の漁業は全面的に禁止されて漁船は一括繋留され、短波ラジオやカメラの所有も禁じられました。鉄道や製材所からも解雇されるなど、経済的にも社会的にもかつてない弾圧と不安が日系社会を覆い尽くし、人々は家畜収容棟を改装したヘースティング共進会場などに集められ、家族は解体されていきました。

BC 保安委員会（BCSC）の設立と NC 紙の新たな役割 日系人の内陸部への「総移動（強制移動）」を管理・執行するため、カナダ連邦政府は 1942 年 3 月 4 日に「BC 保安委員会（BCSC）」を設立しました。BCSC は移動に関する指令を次々と出しましたが、その主旨は日系社会に全く徹底されませんでした。なぜなら、政府自らが邦字紙の発刊を停止させた結果、英語を解さない多くの一世に

情報を伝達する手段が失われていたからです。この皮肉な状況を打破するため、BCSC は戦時中も唯一刊行を許されていた二世向けの英字紙『ニュー・カナディアン (NC)』を利用することを思いつきました。BCSC は 1942 年 4 月 21 日付から移動が本格化する 6 月 30 日まで NC 紙を買い切り、全日系人に無料で配布しました。そして、NC 紙に邦字面（日本語欄）を作らせ、政府指令の翻訳と解説を掲載させたのです。

これにより NC 紙は、一部の「構造的同化志向」をもつ若き二世のためのサロンの新聞から、一世を含む全日系人を対象とする「BCSC の告知板」へと劇的な変貌を遂げました。若き二世の編集者たちは、目まぐるしく変わる情勢の中で、防衛地域からの退去や移動に関する最新情報を日本語で解説し、不安に怯える同胞のために献身的な努力を払いました。彼らは単に政府の指令を伝えるだけでなく、日系人が一般のカナダ社会と摩擦を起こさないよう、「手紙はすべて検閲されるので英語で書くのがよい」「白人宛の手紙に日系人宛の手紙を同封しないように」といった、検閲を円滑に通過するための細かな生活指導まで行い、日系社会のナビゲーターとしての役割を担いました。また、NC 紙自体も日系人の強制移動の波を反映し、バンクーバーから内陸のカスロー、ウィニペグ、そしてトロントへと転々と移転しながら発行を続けました。

検閲の実情と日系社会からの反発 戦時中の NC 紙は、日系人にとって唯一の情報源として重宝された一方で、カナダ政府による極めて厳重な検閲の下に置かれていました。NC 紙は開戦から 1945 年 8 月 18 日まで当局の検閲を受けており、報道内容が反政府的でないだけでなく、「英字欄と日本語欄の内容が完全に一致していなければならない」という厳しい条件が課せられていました。さらに、政府は NC 紙を政策の正当化のために利用しました。日系人は道路キャンプや砂糖大根（ビーツ）栽培などの過酷な条件下で強制労働をさせられていましたが、政府は NC 紙に対して、そうした移住先の状況を「明るい」面だけ報道するよう要求しました。編集者が楽観して書いた記事ですら差し止められることがあり、実際の悲惨な労働実態と紙面の報道との間には大きなズレが生まれました。このギャップは、読者である日系人の間に NC 紙への強い不信感を植え付けました。当時の一世代の多くは依然として「反同化志向」を持ち、隠した短波ラジオで日本の大本営発表を聞いて日本の勝利を固く信じているような状況であったため、カナダ政府の指令を伝える NC 紙を「政府御用新聞」とみなし、冷淡な態度や強い反発を示しました。財政的にも NC 紙は極端に窮屈で、広告収入や購読料は僅かであり、少数の一般読者や葬儀の遺族からの寄付などで辛うじて維持されるという貧乏世帯ぶりでした。

政府への抵抗と NC 紙の歴史的意義 当初は「政府を信頼せよ」と日系人に協力を呼びかけ、BCSC の告知板として機能していた NC 紙ですが、カナダ政府のあまりにも非人道的な政策を前に、次第

にその姿勢を変化させ、政府と距離を置くようになります。1943 年 1 月に政府が日系人の財産（漁船や不動産など）を所有者の意志に関係なく底値で強制処分する決定を下すと、NC 紙はこれを「大いなるショック」と報じ、カナダ政府に対する不信感を明確に表しました。さらに 1944 年には、日系人の拡散を恒久化しようとする居住・移動制限や、踏み絵のような「忠誠心調査」に基づく日本への強制送還政策に対し、「何を基準に忠誠心の有無を決めようとするのか」と根本的な疑問を投げかけ、強く反発しました。NC 紙は、民主主義の基本である市民の人権と自由を平気で無視するカナダ政府を批判し、「日本送還の申し出を受け入れてはならない。市民の権利取得の希望を放棄してはならない」と読者に力強く訴えかけました。

このように NC 紙は、厳しい検閲と一世読者からの不信、そして極度の資金難という何重もの限界に縛られながらも、単なる政府の言いなりになる広報紙にとどまることはありませんでした。理不尽な政府の政策に抗議し、カナダ社会の良識派と結びついて民主主義と市民権の正当性を主張し続けた NC 紙は、暗い時代において若き二世たちにカナダ人としての誇りと権利意識を啓発し、戦時下の日系社会を導く「社会の木鐸」としての極めて重要な役割を果たしたのです。

ニュー・カナディアン紙の紙面構成とニュース源

戦時中の『ニュー・カナディアン（NC）』紙の紙面構成とニュース源は、戦時下の厳しい制約や極端な経営難を色濃く反映したものでした。

紙面構成について 開戦前は一部の二世向けの英字紙でしたが、日系人の総移動を管理する BC 保安委員会（BCSC）の告知板として利用されることになり、全日系人（特に英語を解さない一世）に向けて新たに**日本語欄（邦字面）**が設けられました。

紙面の規模や発行頻度は、情勢に応じて以下のように変化しました。

- **開戦前～1941 年末：**週刊で 8 頁建てでした。
- **1942 年初頭～：**日系人の強制移動が本格化し、目まぐるしく変わる情勢や政府の指令を迅速に伝えるため、4 頁建てに縮小する代わりに週 2 回の発行となりました。
- **1942 年 11 月末以降：**再び週刊に戻り、英文 4 頁、邦文 4 頁の合計 8 頁建てという構成になりました。

紙面の内容としては、BCSC の指令の翻訳や解説が掲載されたほか、余った紙面には社説やその他の日系人関係のニュースが盛り込まれました。

ニュース源（情報源）について 厳しい移動制限と資金難のため、NC 紙のスタッフが自ら現地に赴いて取材活動を行うことはほとんど不可能な状態でした。戦時中の例外的な直接取材は、1943 年 5 月からの梅月高市による 1 ヶ月間の平原州訪問と、その直後の生山国人による 3 週間の東部（オンタリオ州など）訪問のみに限られていました。そのため、NC 紙は主に以下の 2 つをニュース源として依存していました。

1. 他紙からの切り抜き（他紙の引用） 情報の大部分は、カナダの一般英字紙や、米国の邦字紙からの切り抜きに頼っていました。特に米国では、戦時中も内陸部で複数の邦字紙が刊行を継続していたため、米国の対日系人政策や日系米人の動向が正確かつ迅速に報じられていました。NC 紙はこれらの情報源を利用し、カナダ政府の政策と米国の政策を比較しながら日系人の進むべき方向を模索していました。

2. 読者からの投稿（投書） もう一つの極めて重要な情報源は、各地に分散した読者からの投書でした。特に 1943 年以降は読者からの投稿が数的に急増し、かつ長文になる傾向がありました。一人の投稿が日本語欄の 1 頁をまるごと独占することも珍しくありませんでした。内陸転住所に収容された人々は時間を持て余しており、同胞に新しい土地での生活状況を知らせたいという思いや、自分自身の経験や感情を「表現」したいという強い欲求があったためです。当局の厳しい検閲下（良い面を前面に出さざるを得ない等の制約）にありながらも、これらの投書を通じて、各地の厳しい生活状況や日系人の屈折した心理が詳細に紙面で伝えられていました。戦時中の NC 紙は、半分は「読者が作った」と言えるほどの状況であったとされています。

戦後のニュー・カナディアン紙

提供された資料およびこれまでの会話履歴に基づき、戦後の日系カナダ人社会の変容と、日系紙および『ニュー・カナディアン（NC）』紙の役割について要約します。

1949 年以降のカナダでは自由主義や人道主義が少数民族にも適用され、日系人に対する数々の制約や人種差別はほとんど姿を消しました。1949 年春には大都市への居住が許可され、戦時中に強制移動させられていた日系人の多くはトロントなどの東部都市部へ移動して新たな生活基盤を築き、一部は太平洋岸へ戻って漁業などへ復帰しました。また、日系社会の世代交代も進み、二世はカナダ社会の各分野へ進出して「成功」を収め、白人との結婚も増加しました。さらに、戦前や戦時中において日系社会を二分していたカナダへの「文化的同化志向」と、日本への帰属を求める「反同化志向」のイデオロギー対立も自然に解消しました。これは、日本敗戦による幻滅や、戦後のカナダの経済的繁栄と差別の撤廃により、一世たちもカナダを「墳墓の地」と定めて永住と同化を決定したためです。

こうした社会情勢の劇的な変化は、日系紙の性格と読者層を大きく修正しました。英語を母語とする二世たちは、一般英字紙などから直接情報を得られるようになり、市民としての権利を回復し生活が安定すると、日系人特有の国際・国内問題に関する報道を必要としなくなりました。その結果、二世読者は急速に日系紙から脱落していきました。一方で、一世は依然として日本語による情報を必要としていたため、戦後の日系紙は再び「一世の新聞」へと変身していくことになります。また、戦前はバンクーバーに集中していた日系人社会が、戦後の移動によってカナダ全土に分散した結果、日系社会内に「地域主義」が台頭しました。それに伴い、日系紙の報道や全国組織の活動においても、東部と西部など地域間の利害対立や足並みの乱れが表面化するようになりました。

戦中から唯一刊行を継続していた二世向けの英字紙『ニュー・カナディアン（NC）』も、戦後社会においてその役割を大きく変えていきました。戦時中や戦後直後の『NC』英字面は、政府の理不尽な政策に怒り、日系人がカナダ市民としての権利を取り戻すために「構造的同化」を力強く主張して闘う新聞でした。しかし、戦後に入り日系人が市民権を回復し、家族を養い安定した職業に就くようになると、『NC』が果たすべき正義の主張や闘いの対象は解散してしまいました。当初の使命を達成した『NC』の英字面はかつての情熱を失い、「二世ボウリングクラブのニューズレター」と揶揄されるような、娯楽中心の軟らかい紙面へと変貌を遂げていきました。

同時に、『NC』の邦字面（日本語欄）も変質を余儀なくされました。1948年末、戦前の有力紙『大陸日報』の流れをくむ『大陸時報（時報）』が発刊されると、『NC』と『時報』の間に激しい「一世読者の争奪戦」が展開されるようになりました。戦前の保守的な一世層をガッチリと掴んでいた『時報』に対抗するため、『NC』は急速に姿を消しつつある一世読者を防衛しなければなりません。そのため、1949年に入ると『NC』は英字面と邦字面が完全に独立し、邦字面からはそれまで掲載されていた社説が消滅しました。「社会の木鐸」としてのオピニオンリーダーのポーズを維持し続ける余裕がなくなったのです。

思想的なリーダーとしての役割を後退させた『NC』でしたが、それに代わって一世読者に対する「同胞への奉仕」という新たな、そして極めて重要な役割を担うようになりました。戦前の労働者向け新聞『日刊民衆』時代から労働者の世話係を務めていた邦字面編集者の梅月高市は、その精神をそのまま『NC』の邦字面に持ち込みました。「NC」は単なる報道機関にとどまらず、日系一世のための「親しい連絡機関」や「生活相談所」のような存在となりました。言葉の壁に苦しむ一世のために、恩給の相談に乗ったり、戸籍謄本の英訳、カナダへの帰化や日本籍離脱の手続き、さらには死亡届の代書まで、あらゆる雑多な生活支援を引き受けました。これは「ビジネスとしての新聞経営」とは全く逆の哲学に基づく、同胞への献身的な奉仕活動でした。

『時報』がスマートで日本の記事を多く載せ、日本企業や領事館と親密な関係を築いていたのに対し、『NC』は泥臭く「田舎臭い」新聞と評されることもありました。しかし、戦中戦後の混乱期に『NC』の献身的な世話になった一世たちはきわめて義理堅く、その恩を忘れることはありませんでした。彼らは、新聞を読む読まないにかかわらず、家族の連絡機関を維持するための経費を分担するような感覚でお金を送り、購読し続けました。日系人が本当に助けを必要としていた暗い時代に提供したエネルギーが、後に『NC』を存命させるエネルギーとして還元されたと言えます。こうして、読者との深い絆と信頼に支えられた『ニュー・カナディアン』は、一世の新聞へと数奇な転身を遂げながらも存続し、カナダ日系史上最長命の新聞としての地位を確立したのです。

ニュー・カナディアン紙の制約

戦時中のカナダにおいて、『ニュー・カナディアン（NC）』紙は唯一刊行を継続できた日系新聞であり、情報源を絶たれた日系社会にとって重要な役割を果たしました。しかし、同紙が日系カナダ人全体の声を完全に代弁できなかったのには、主に3つの大きな理由がありました。

第一の理由：厳しい検閲と「政府御用新聞」化による不信感 最大の要因は、カナダ政府による極めて厳しい検閲の存在です。NCは開戦から1945年8月まで当局の検閲下に置かれ、単に反政府的でないだけでなく、社説や主な報道において「英字欄と日本語欄の内容が完全に一致していなければならない」という制約を課されていました。さらに政府は、道路キャンプやビーツ栽培、内陸部への再定住といった過酷な強制労働プログラムについて、意図的に「明るい面」を報道するようNCに要求しました。実際の苛酷な労働条件や悲惨な生活実態と、紙面で報じられる楽観的な内容との間には大きなズレが生じました。この報道と現実の乖離が、苦境にある読者の間にNCへの強い不信感を植え付け、「政府御用新聞」とみなされて反発を招く要因となりました。

第二の理由：同化志向と反同化志向というイデオロギーの対立 日系社会内に存在した世代間・思想間の深い溝も大きな理由です。NCはもともと、カナダ生まれの若き二世を中心とした「構造的同化志向」を持つ新聞でした。彼らは理不尽な強制移動や財産没収を受けながらも、カナダへの忠誠を誓い、カナダ市民としての正当な権利を主張して闘う立場を貫きました。しかし、長年の排斥に疲弊し、戦時下の苛烈な弾圧を受けた一世の多くは、逆に「反同化志向（日本回帰）」を強めていました。日本に心の拠り所を求めている保守的な一世にとって、NCのカナダ協調的でマイルドな論調は受け入れがたいものでした。そのため、NCの思想に反発する一世たちは同紙に対して冷淡であり、自らの声を紙面に一切投稿しないなど、明確な断絶が生じていました。

第三の理由：極度の資金難と移動制限による取材の限界 物理的および財政的な制約により、日系人の実態を深く掘り下げられなかったことも挙げられます。戦時下で日系人の経済活動が停止したた

め NC は極端な財政難に苦しみ、加えて日系人に対する厳格な移動制限の網が敷かれていたため、スタッフが自ら現地に赴いて取材活動を行うことはほぼ不可能でした。例外的な数週間の出張を除けば、NC の情報源は他紙（一般英字紙や米国の邦字紙）からの切り抜きや、読者からの投書に依存せざるを得ませんでした。しかも、投書を行う読者自身も検閲の眼を意識して批判的な内容を控えがちであったため、広大なカナダ各地に分散・収容された日系人の生活の深部や、彼らが抱えていた真の不満にまでメスを入れることができなかったのです。

このように、政府の検閲による報道の歪み、世代間の思想的対立、そして取材活動の物理的・財政的限界という何重もの制約が絡み合った結果、NC は戦時下の日系カナダ人社会の多様な実態や、特に一世が抱えていた屈折した声を完全には代弁しきれなかったといえます。